

マルセイユ音楽院でジョゼフ・ランバルの下でフルートを始め、パリ国立高等音楽院でジャン＝ピエール・ランバルに師事。フランス国立管弦楽団で12年間ピッコロ奏者を務める。サイトウキネンフェスティバル in 松本や日本フルートコンベンション in 札幌などに参加。ピッコロ・ソロで多くの録音を行い、この世界のバイオニアとして著名。ピョートルからピッコロ練習曲集シリーズも出版している。現在マルセイユ音楽院でピッコロ科とフルート科の教授。世界各国でマスタークラスも行う。

◎ピッコロ・ソリスト／マルセイユ音楽院教授

ピッコロ・ソロの パイオニアは マルセイユ楽派

伝統のその特徴は「舌引き」タンギングにある

読者の中には、この人のピッコロ・ソロのレコードで育ったという方も少なくないはず。誰よりも早くピッコロ・ソロのジャンルを開拓し、現在まで多くの録音を残しつつ、さらにレパートリーの開拓を現代の作曲家たちにまで拡大しようとするバイオニア精神は今なお変わらない。

取材・構成：秋山君彦（フルート奏者） 通訳：東條茂子（フルート奏者） 取材協力：ドルチェ楽器東京本店

——今回で何度めの来日ですか？
ボーマディエ フランス国立管弦楽団で2回、サイトウ・キネン・オーケストラ（1998年、ピッコロ）や日本フルートコンベンション（2005年・札幌）でも来ているので、今度で5回めです。
——最初の来日の時に、誰よりも早く会場にいらして、客席のロビーでモイズのソノリテをピッコロで練習されていたのを覚えています。
ボーマディエ あの時ロリン・マゼールと一緒に来ました。パトリック・ガロワがまだオケにいた頃ですね。私がフランス国立管弦楽団に入ったのが1974年、最初は3番フルート兼2番ピッコロで、その時のソロ・ピッコロが、首席を降りたフェルナン・デュフレースでした。その後、デュフレースが辞めたので1976年に私がソロ・ピッコロになり、85年まで在籍しました。76年にマリオンがアンサンブル・アンテルコンタンポランに移ってしまったので、デュフレースは辞めてからもちよくよくエキストラに来ていましたね。
——デュフレースの印象は？
ボーマディエ ずいぶん一緒にやらせてもらいました。彼は決してソリストになろうとしなかったことなどから、一般にはストイックなイメージがあります。有名なジョリヴェの協奏曲の録音のときも、自分は目立つのはいやだと言って、いつものオケの定位置で座ったまま吹いてしまったり。でも私は逆に、彼はかなりラ

ンバルに近いという印象をもっています。前向きで、隣でいつも演奏する喜びを感じさせてくれました。そして息もいっばい吸い、たくさん使って吹く感じでしたね。オケの細かいアドバイスもよくしてもらいました。
マルセイユのフルート奏法の
特徴はタンギングにある
——オケに入る前のプロフィールを教えてください。
ボーマディエ フルートを始めたのは12歳です。ポピュラー音楽が好きだったので最初はサックスをやるうと思っていたのですが、祖母の家にフルートがあったり、ソルフェージュの先生の家がたまたまジョゼフ・ランバルの家の隣で、しかも先生の息子さんもフルーティストだったり、偶然が重なってフルートに落ち着きました。
——ジョゼフ・ランバルのレッスンはどのようなもの？
ボーマディエ 私がマルセイユの音楽院で習ったのは6か月間だけでしたが、とにかく存在感のある人でした。正しいアンブシュアになるように唇に楽器を当ててくれたのもジョゼフです。レッスンでよく覚えているのは、「間違えたら1フレーズだぞ」としよっちゅう言われたこと。後にわかったのですが、ジョゼフは若い頃、なんと大太鼓のアルバイトをやっていた、指揮者に「間違えたら1フラン払え」と言われていたらしい（笑）。

12歳からマルセイユ音楽院でフルートの手ほどきを ジョゼフ・ランバルに受ける。

ジャン＝ルイ・ボーマディエ

